

おわりに

「知ることは、民主主義の基本である。私たちは様々な事実を知ることによって判断し、行動する」「報道の自由も……国民の知る権利にこたえる重要な役割を担っている」(関西テレビ「放送記者読本」)

カメラの後ろには幾千幾万の目をこらす市民が、マイクを向ける記者の後ろには幾千幾万の耳をすます市民がいる。報道に携わる者は、その背後に幾千幾万の市民から信託を受けている重みがある。

報道機関の力の源泉は、市民にある。民主主義社会で、市民が自分の意見を持ち、自分で考えるための正しい情報を提供していることこそが、報道機関の存立の基盤である。したがって、報道は、市民、すなわち視聴者の信頼を失えば、その力の源泉を失う。

今回の問題の本質は、関西テレビがいう「不適切な映像表現」ではなく、テレビを信じてモザイク映像の放送を容認している視聴者の信頼を裏切るような「許されない映像」が放送されてしまったことにある。しかも、関西テレビにその認識が欠落していたことが、3か月余りもの間、自主的・自律的な是正がなされなかったという残念な結果につながっているのではないだろうか。

関西テレビは、2007年『発掘！あるある大事典』のねつ造問題で、厳しい批判を浴びた。その後、第三者による調査委員会を作り、検証番組を放送し、真摯に努力して、一連の問題から多くの教訓を得て、詳細な「番組制作ガイドライン」を発表するなど、活発に活動してきた。その関西テレビで、今回の問題が生じたことに、驚きがある。「あるある問題」の教訓は風化してしまったのだろうか。

組織を整え、ガイドラインを整備しても、それが美しく整えられた形としてあるだけでは機能しない。今回の問題に直面して適切な判断ができなかったのは、組織整備の理念、ガイドラインの根底にある理念が、十分血となり肉となっていなかったからではないだろうか。

委員会の調査の結果明らかになったのは、このような放送を事前に防ぐことができた機会や迅速な訂正をする機会が、何度もあったにもかかわらず、放送倫理に違反する結果を引き起こしたという残念な現実である。

関西テレビがそのひとつひとつの対応を決めるとき、テレビの前で目を凝らし耳をすます幾千幾万の視聴者の姿は、見えていただろうか。そうした視聴者、すなわち、本来報道機関が奉仕すべき市民への視線の弱さ、寄せられている信頼への認識の薄さを、委員会は憂慮する。

調査の過程で、何人もの現場スタッフに話を聞いた。いずれも、エネルギーにあふれ、主体的に働く能力のある人たちであった。現場での日々の仕事の工夫を楽しむ、プロの自負もよく見えた。今回の件を聞いて、おかしいと直観的に感じるアンテナも持っていた。番組制作の企画、取材、編集、放送にいたる過程の中で、それぞれの担当者の知識と知恵を凝縮していく実効性のある組織作りがなされれば、この現場の力をもっと活かせるのではないだろうか。関西テレビが、現場の一人ひとりの担い手の感性と技能を的確に活かしながら、より良い番組を制作することで、視聴者の信頼を回復する努力を持続することを、委員会は期待する。

テレビを見る視聴者の視線は、変化している。視聴者は、もはや、「テレビで放送されたこと」を無邪気に信じる観客ではない。テレビの手法を知り、時には疑いの目で番組を分析し、作為を嗅ぎ取って突き放す。そのような時代に、テレビに対する信頼を守るためには、報道に限らずテレビの現場の一人ひとりが、テレビの前の視聴者への想像力を失うことなく全力で番組を作っていくしかない。それが、問題が生じたときの的確な対応につながり、視聴者のテレビに対する信頼を育てていくに違いない。